宮崎汎会員が見た世界の旅第２編第１６話

光と影の画家レンブラント　オランダ

絵画への関心を抱くようになったきっかけは、美術評論家の富永惣一氏と住友電工会長を務めた川上哲郎氏のお二人から、絵の話になった時には話題についていける程度の勉強をしなさいと諭されたことに始まる。それまで美術には関心が乏しかったが、勉強のつもりで画集などを見ながら少しずつ知識を得るように努めた。実際に美術館に足を運んだのは、既に記憶があいまいであるが、ずいぶん昔上野の西洋美術館へ入った時だろうか。光と影の画家であるレンブラント展であった。その時対面した絵は「ダナエ」である。絵を目の前にして、どうした訳か身震いするほどの強烈な感動を覚えた。帰途さっそくレンブラントの画集を買い求めた。初めて買った画集である。以来レンブラントのとりこになった。

黄金のかぶとの男
旧西ベルリン美術館

まわりには印象派のファンが多いのに、なぜかレンブラントに心惹かれ海外へ行くとレンブラントの絵画の前に立つのが常であった。特に強く引き付けられた絵は「黄金のかぶとをかぶった男」である。まだ東西ベルリンが無粋な壁を境に厳然と分け隔てられていた時代にベルリンの美術館で目にした。凛々しくもなんだか悲しそうな顔つきと黄金色に輝く立派なかぶとに魅せられた。その後この絵はレンブラント自身の筆にならず、どうもレンブラント工房の作ではないかなどといわれ彼の作ではないとの判定がなされたが。

放蕩息子の帰還
エルミタージュ

これまで沢山のレンブラントの絵を見てきて一番心に訴えてきた絵はと問われると画集で知った「放蕩息子の帰還」である。その絵は女帝エカテリーナの収集した美術品を展示するエルミタージュ美術館にあることを知った。
欧州出張の帰途、当時のソ連（現ロシア）へ立ち寄り遂にエルミタージュで見たかった絵と対面できたのである。
その絵画の前に立った時しばらくたたずみ見惚れた。尾羽打ち枯らして戻った子供を親の温かな気持ちで迎えた場面が直に伝わり涙が出る様な感動を覚えたものである。絵は晩年の作といわれている。
その後ワシントンＤＣのナショナルギャラリーで同じ題名のスペイ

ンの画家、ムリーリヨの描いた絵をみて「放蕩息子の帰還」の絵が二つあることを知った、いずれも新約聖書ルカによる福音書を題材に描き、イエスキリストが語った神の憐みのたとえ話をイメージして描かれたものと知った。レンブラントは若いころから、老いさらばえていく自画像を沢山描いている。その数１００枚以上はあるだろうといわれているが、加齢と共に生気の無くなっていく自分をじっと見つめて描く画家としての冷徹さに心うたれる。

ムリーリヨの放蕩息子の帰還

アムステルダム国立美術館にある彼の代表作「夜警」は誰もが驚くほど巨大な絵画である。
絵の注文主は火縄銃手組合で、題名は「フランス・バニング・コック隊長の市警団」通称夜警である。絵の中の人物は等身大に描かれているが、画中でスポットライトがあてられているのは団長と副団長の二人と何故か男の中に一人だけ鶏をぶら下げた女性が描きこまれている。この女性も明るくくっきりと描かれている。三人以外は背景としてしか映らず同じ金額を支払ったのにと団員から苦情が寄せられたと伝えられている。同美術館には夜警以外にもオランダの人々が誇りに感じる大画家レンブラントの絵が沢山展示されている。

夜警・アムステルダム国立美術館

レンブラントが家庭を持ち充実した生活を営み、最愛の妻サスキアと住んでいた家がアムステルダム市内の一角にレンブラントハウスとして現存している。ずいぶん立派な家である。かつてのこの家の主は晩年零落し人々の記憶から薄れ忘れ去られていったのであろうか。
17 世紀レンブラントの生まれ育ったころのオランダは国力が盛んで財を成した市民が画家に注文する肖像画は多くオランダ絵画が最も栄えた時代と言えよう。
ところでレンブラントの絵画の背景には本が描かれている場面が多いことに気が付いた。推測する

アムステルダムのレンブラントハウス

読書する老母
アムステルダム
国立美術館

聖家族
エルミタージュ美術館

織物商組合の幹部たち
アムステルダム国立美術館

レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン　オランダを代表する画家
（１６０６年7月15日～１６６９年１０月１４日）　光と影を使い明暗をはっきりさせる技法を用いたバロック絵画の巨匠。聖書や神話の世界さらに肖像画を題材に多くの作品を制作した。特に肖像画家として大いに人気を博したが、晩年は最愛の妻や子を亡くす不幸にみまわれ、また財産を失うなど、どん底の生活を送った。
レンブラントは製粉業を営む家の 9 人目の子としてオランダのライデンにて生まれた。１６１３年ラテン語学校に学んだ。才能に優れ１４歳でライデン大学へ入学するも画家を目指し退学する。３年ほど絵画技法等必要な技能を学び、エッチングや版画の技法にも挑戦する。
１６３１年アムステルダムに移り肖像画の仕事を始める。集団肖像画「テュルブ博士の解剖学講義」で名声を高めた。１６３３年レンブラントは裕福な家庭のサスキアと結婚し、彼女をモデルに多くの作品を描いている。レンブランドの評価は高くさらにサスキアの持参金などで豊かな生活を送るようになり１６３９年豪邸を購入しさらに大きな工房を運営し多くの弟子を抱えるなど、加えて浪費癖と相まって多額の出費を重ねていった。
１６４０年に大作夜景を完成させている。この頃レンブラントは多くの不幸に見舞われている。3人の子供を亡くし母も亡くした。１６４２年生活を支えてくれた最愛の妻サスキアが２９歳の若さで他界してしまい、順風だった生活は次第に下降していく。
１６４９年家政婦ヘンドリッキエを愛人として子をなした。相変わらずの浪費癖などで彼の生活はひっ迫し遂には自身の邸宅を売り払い、貧民街といわれる地区に移り住むこととなった。
画家としての評価は依然高かったが次第に生活は苦しくなり、遂にはサスキアの墓所まで金策のため売り払うなどした。１６６９年唯一生き残っていた息子ティトゥスを亡くし、ヘンドリッキエとの間に生まれた娘コルネリアと貧しく寂しい暮らしを強いられた。
１６６９年１０月１４日、栄華を極めそして沈んだ波乱に満ち満ちた６３歳の生涯を閉じた。

余談　１９８８年ソ連（現ロシア）へ入国し、モスクワとレニングラード（現サンクトペテルブルク）を訪れた。レニングラードでは２日間にわたり、エルミタージュ美術館へ向かった。感銘を受けたレンブラントの「ダナエ」を見たい一心である。探したがどこにも見当たらず、２日目に日本語通訳を介し尋ねた。係員曰く、絵は不心得者に傷つけられ展示してない。修復がいつ済むか不明

であるとそっけない返答で去っていった。事実かどうかも確かめられず残念ながらすごすご引き上げたのである。

フローラに扮したサスキア
ロンドンナショナルギャラリー

老母
ウィーン美術史博物館

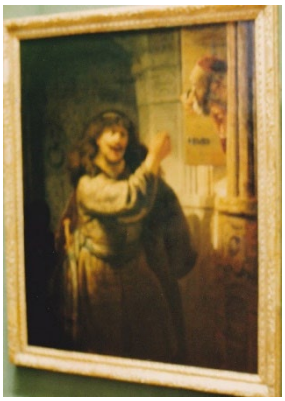
カーネーションを持つ女
メトロポリタン美術館

パテシバ　ルーブル博物館

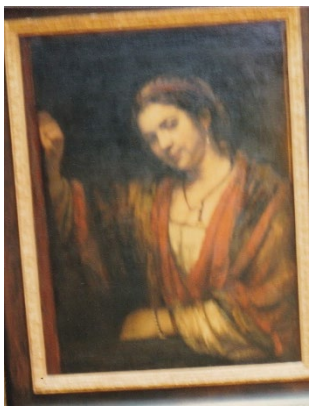
アンナとトピト
アムステルダム国立美術館

ユダヤの花嫁
アムステルダム国立美術館

エルサレムの滅亡を嘆くエレミア
アムステルダム国立美術館



義父を脅かすサムソン
西ベルリン国立美術館



ヘンドリッキエ
西ベルリン国立美術館

自画像

自画像　メトロポリタン

自画像

左の絵画はマドリッドのプラド美術館所蔵の「ユーディットホロフェルネスの晩餐会」の絵であるが、記念にプラド美術館の売店で購入したコピーである。
顔はレンブラントの妻サスキアであるように見える。
写真は沢山とったが、インスタントカメラで写したものはピントが甘くぼやけ、銀塩フィルで撮ったものは色があせ見にくくなってしまった。